二〇一九年度　愛知県公立高校入試問題（A）

四五分
二二点

一

次の文章を読んで、あとの㈠から㈤までの問いに答えなさい。

1 生命の歴史の中で眼(め)が誕生したのは約五億四千三百万年前から五億三千八百万年前頃のカンブリア紀であると言われている。それ以降、数多くの生命が眼によって世界を見ることを選んできた。光を感知する眼は他の感覚器官よりも柔軟で、広い範囲を知覚できる構造を持っていることがその要因かもしれない。光は物質にあたると、その一部が吸収されその一部が反射される性質を持っている。その反射された光を眼は捉え、距離を近づけなくても周囲の情報をつかむことができる。そして眼は五感の中で、最も遠くまで早く自由に動くことができる。眼は自らの意思で見たい方向や焦点を動かし、眼に入る光を自由に選択できるのだ。その視線を導くのは、その生命が持つ「関心」である。生命にとっての最大の関心ごとは明白だ。それは自らの生存である。その環境の中で自分が生きるために必要な情報を探すために眼は生まれたと言ってもいいだろう。だが生存に必要な情報は生命によってそれぞれ異なる。だから眼の構造もまるで異なる形を取るのである。

2 人間の眼の構造自体は他の生物の中でもそれほど特殊なものではない。光を特別たくさん取り込むわけでもなく、赤外線や紫外線が見えるわけでもない。しかし人間の眼は他の生物とは①決定的に違う能力によって特殊なものになっている。それは私たちの頭の中の想像が含まれていることである。しかもそれはかなり過剰な想像であり、私たちの眼はその想像と切り離して何かを見ることができない。本来私たちの眼に飛び込んでくるものはすべて単なる光の波である。しかしそれは単に物体に反射した光として受け止められて終わりではない。光を反射した物体の名前や材質、その意味や価値、さらにはそこにある理由や先の可能性というように、光そのものから派生した様々な想像を重ねる。その想像は他の動物の眼に含まれるものと比べると割合が多すぎると言える。人間の想像力は明らかに生命を維持するのに必要なもの以上の関心を周囲に向けているのである。

3 なぜそうなってしまったのだろうか。その理由として考えられるのは、人類が生存するためにその過剰な想像力が必要であったこと

だ。それは長い生命の進化の中で人類だけが培（つちか）った特殊な能力でもある。その過剰な想像力という類いまれなる能力によって私たちは厳しい自然の中を生き抜いてきた。想像力は直接的に役に立つような能力だとは思えない。しかしそれは結果として人類の拡大を推し進めた。過剰な想像がブレンドされた眼は、②環境にある情報を単に見るだけではない。自分の必要性に合わせて、環境にあるものを自由に加工（デザイン）する可能性も同時に見ることができる。それが石器や釣り針、舟といった数多くの精巧な道具を生みだすことへとつながったに違いない。そうした複雑な道具は、様々な角度から自然を眺めて、その成り立ちや因果関係を想像することなくしてはつくることができないからだ。

［4］人類の生存戦略は動物の進化とはまるで異なり、身体を環境に適応させる形ではなかった。寒いところで生存に適しているのは、分厚い毛皮を持った生き物かもしれないが、人類は衣服を着ることで体温を調節できる。爪や牙を持った虎に、人類は素手では勝てないが、槍（やり）やこん棒を手にすることで互角に渡り合うことができるかもしれない。そうやって自然を加工して物や道具を生みだすことで、身体を外へと拡張させながら生き延びる。そうして③他の生命とは全く異なる生存戦略を人類が選んだのは、視覚の中に想像力が滑り込んだことが原因である。そこから人類の進化は遺伝子を変化させることではなく、自然を加工して文明を進歩させることへと変わったと言える。自然の加工という観点だけで言えば、ビーバーや鳥、蟻（あり）さえも様々なものを集めて巣作りをする。そして道具をつくる能力という点においてはチンパンジーにもその能力が備わっていることを証明した、霊長類学者のジェーン・グドールの話は有名である。しかし人間の眼に含まれた、その過剰な想像力は、見えないものを観（み）る力まで生みだす。そこにあるものに想像を重ねるだけではない。そこにないようなもの、さらにこの世界のどこにも存在しないようなものを想像する力も持っている。この見えないものを観る力を持っていることが人間の最大の特徴である。

［5］人間が持つ過剰な想像力には大きく三つの特徴があると考えられる。一つ目の特徴は、そこに存在するものを想像することである。眼に見える対象物を知覚するだけではない。その知覚したものに想像を重ねることで、解釈して理解できる。それは認識や推測とも呼ばれるものと関係している。二つ目の特徴は、そこに存在しないものを想像することである。眼の前にその対象物は見えない。しかしかつて見たり聞いたり経験したことがあるものを人間は想像する。あるいはこれから経験するであろうものや可能性を想像する。その想像は回想や予想などと呼ばれるものとも関係している。三つ目の特徴は、どこにも存在しないものを想像することである。姿も形も

なく、存在そのものがないものであっても人間は想像することができる。そしてその想像を存在のように観ることができる。また存在するものの性質や特徴や要素だけを取り出し、抽象化して捉えることもできる。一方で根拠や原因がないようなものを想像する妄想や幻想とも関係する。

6 この最後の特徴が人間にとって非常に重要な能力である。過剰な想像力の源泉はここにあると考えられる。存在しないものを想像する力は自由である。頭の中でどのようにでも想像できるからだ。その自由な想像が、目の前の物事の認識や解釈、記憶の中の回想や、未来の予想にも大きな影響を及ぼしている。こうした想像力は人間だけが持つものだと思える。その見えないものを観る力をここでは「空想」と呼ぶことにしたい。この「空想」こそが人間のまなざしの正体であり、人間の知性を支えていると思われる。

（ハナムラチカヒロ「まなざしのデザイン―〈世界の見方〉を変える方法」より）

（注）○ 1～6は段落符号である。
○ ブレンド＝まぜ合わせること。

(一) 第一段落の中で、筆者は生命が眼を備えるようになった理由について述べている。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 生命が自らの命を維持するには、生きるために必要な光をできるだけ多く体に取り込むことが求められるから。
イ 生命が環境の中で生きていくには、生存するために必要な情報を広範囲にわたって捉えることが求められるから。
ウ 生命が環境に適応していくには、光を素早く感知することで他の感覚器官の負担を減らすことが必要だから。
エ 生命が存続するには、自らが生き延びるために収集した情報を引き継ぐ他の生命を探すことが必要だから。

40

(二) ①決定的に違う能力とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　人間の眼には、物体に反射した光にさまざまな想像を重ね、さらには見えないものまで想像する力がある。
イ　人間の眼には、対象に応じて想像を使い分け、生存するために必要なあらゆる情報を見抜く力がある。
ウ　人間の眼には、環境を味方につけ、他の生物との生存競争に勝つために必要な情報を想像する力がある。
エ　人間の眼には、受け止める光の割合を増やし、光から派生した多くの想像を働かせて対象を見る力がある。

(三) ②環境にある情報を単に見るだけではないとはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　人類は、他の生命にはない想像力を用いることにより、自らを特殊な能力をもっている存在と見なすことができるということ
イ　人類は、想像から切り離して客観的に対象を見ることにより、環境を自由につくり変えていくことができるということ
ウ　人類は、特別な眼の構造をもつことにより、自らが知覚できる範囲を自在に調整しながら想像を補うことができるということ
エ　人類は、さまざまな角度から対象を眺めて想像を加えることにより、新たなものや道具までつくり出すことができるということ

(四) ③ 他の生命とは全く異なる生存戦略とあるが、人類の生存戦略の特徴を動物と比較して要約し、六十字以上七十字以下で書きなさい。ただし、「適応」、「文明」、「過剰な想像力」という三つのことばを全て使って、「人類は、……」という書き出しで書き、「……生き抜いてきた。」で結ぶこと。三つのことばはどのような順序で使ってもよろしい。

（注意）・句読点も一字に数えて、一字分のマスを使うこと。
・文は、一文でも、二文以上でもよい。

人類は、

(五) 次に示した文章と会話文は、Aさんが本文を読んで「空想」についてまとめた文章と、それをもとにBさんと意見交換をした会話文である。文章と会話文を読んで、あとの①と②の問いに答えなさい。

〔Aさんがまとめた文章〕

筆者は、「空想」が人間の知性を支えていると述べています。「空想」の特徴として、そこに存在するものを想像すること、そこに存在しないものを想像すること、どこにも存在しないものを想像すること、の三つがあります。特に三つ目は非常に重要です。この三つ目の力は、一つ目の物事の認識や解釈、二つ目の回想や予想にも大きな影響を及ぼしていて、物事の性質や特徴などを〔 X 〕して把握することも可能にすると述べています。つまり、「空想」は、人間のさまざまな思想に関わっているといえます。こうした点から、「空想」が人間の知性を支えていることがわかります。

〔会話文〕

Aさん　「空想」の特徴を三つにまとめたけれど、どうでしょう。

Bさん　まず、Aさんがまとめた三つの特徴は、「空想」の特徴ではなく、過剰な想像力の特徴をまとめたものです。その中の三つ目が「空想」の説明になると思います。

Aさん　「空想」は過剰な想像力の一部ですが、人間にとって大変重要な力だということですね。その他はどうですか。

Bさん　「空想」が物事の認識や解釈、回想や予想に大きな影響を及ぼしている理由にも触れるべきではないでしょうか。私は、本文から、「空想」は〔Y〕であるからこそ、認識や予想などに影響を及ぼすことができるのだと思いました。

Aさん　なるほど。存在しないものを想像するということは、頭の中でどのようにでも想像できるということだから広がりをもつのですね。

Bさん　そうです。その他にも〔Z〕ということばが気になります。物事を〔X〕して捉えることができると筆者が述べていることから〔Z〕に結びつけたのだと思いますが、〔Z〕については、辞書に、生活や行動を規定する考え、という説明もあり、このことばの使い方については、もう少し検討する必要があると思います。

Aさん　そうですね。指摘されたことを整理して、書き直してみます。私はこの文章を読んで、人間の「空想」も、創造的な考えを生み出すきっかけの一つになると思いました。

（問い）

①　〔X〕と〔Y〕にあてはまる最も適当なことばを、本文中からそのまま抜き出して、〔X〕は三字、〔Y〕は五字で書きなさい。

X

Y

②　〔Z〕にあてはまる最も適当なことばを、Aさんがまとめた文章中からそのまま抜き出して、二字で書きなさい。

Z

二

次の㈠、㈡の問いに答えなさい。

㈠　次の①、②の文中の傍線部について、漢字はその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

①　玄関に、陶製の犬の置物を据える。

②　今後の福祉政策のあり方についてキョウギをすすめる。

（　　）える

（　　）

㈡　次の③の文中の傍線部と同じ漢字を用いるものを、あとのアからエまでの中から一つ選んで、そのかな符号を書きなさい。

③　この町には、古くから受け継がれてきた民間デンショウがある。

ア　資料集に掲載されている図版をサンショウする。

イ　皆のリョウショウを得て、彼が委員長を務めることになった。

ウ　休憩時間には生徒たちが楽しげにダンショウする姿が見られる。

エ　音楽の授業で「ふるさと」をクラス全員でガッショウした。

（　　）

三　次の文章を読んで、あとの㈠から㈥までの問いに答えなさい。

1　まず人がいて、自分があって、そして言葉がある。言葉と人のかかわりを言うとき、そうした順序で考えられるのが、まず普通です。ただ、言葉と人の関係について考えるなら、①その順序を逆にして考えるほうがいい、とわたしは思っています。まず言葉があって、自分があって、そして人がいるというふうに。この世にあって、人にとってなくてはならないと思えるもの、毎日の生活をささえてきたもののほとんどすべてというのは、人がつくりだしてきたものです。人はさまざまなものを、つくろうとしてつくってきたし、けっしてつくれないと思われるようなものすら、しばしばつくりだします。けれども、人にとって絶対になくてはならないものというのは、必ずしも人のつくったものでなく、言葉もそうです。自分が生まれる前からずっとあって、言葉は、わたしたち自身より古くて長い時間をもっています。ですから、わたしたちは言葉のなかに生まれてくる。そして、自分たちがそのなかに生まれてきたもっとも古い言葉を覚える。成長するとは、言葉を覚えるということです。つくるものでなく、あつらえるものでない。覚えるものが言葉です。

2　毎日の経験を通して、人は言葉を覚えます。覚えるのは、目の前にある言葉です。自分の毎日をつつんでいる言葉です。自分がそのなかに生まれてきた言葉というものを、あるいは言葉の体系というものを、自分から覚えることによって、人は大人になってゆく。あるいは、人間になってゆく。そういうものが、言葉です。にもかかわらず、覚えて終わりでなく、覚えた言葉を自分のものにしてゆくということができないと、自分の言葉にならない本質を、言葉はそなえています。言葉を覚えるというのは、この世で自分は一人ではないと知るということです。言葉というのは、つながりだからです。言葉をつかうというのは、他者とのつながりをみずからすすんで認めるということであり、言葉を自分のものにしてゆくというのは、言葉のつくりだす他者とのつながりのなかに、自分の位置を確かめてゆくということです。人は何でできているか。人は言葉でできている、そういう存在なのだと思うのです。②言葉は、人の道具ではなく、人の素材なのだということです。（中略）

3　今日のように、国境という仕切りが低くなって、人びとをつなぐ基準が世界的に共通になってくると、問われるのは、何がグローバル・スタンダードかということです。言葉はどうか。言葉というのは、どこまでも地域性に根ざすだけに、どうあってもグローバル・スタンダードにならないでしょう。今、世界の通用語とされる英語にしても、グローバル・スタンダードというのとは違うように思い

ます。英語にしても、おそろしく地域性がつよく、専門家であればどこの英語かほとんどわかると言います。シドニーはシドニー風英語、テキサスはテキサス風英語、ベルファストはベルファスト風英語というように。それでも英語が世界の通用語の位置をしめるようになったのは、英語くらい、言葉の完全さをでなく、言葉の不完全さを受けいれてきた言葉はすくないという歴史があるからだろうと思えます。国境を越える言葉は、完全な言葉でなく、〔 A 〕不完全な言葉なのです。たとえば、国境を越えて働きにゆく人たちのコミュニケーションをささえるのが、カタコト言葉と、表情と、身ぶりであるように、です。その意味では、不完全さこそ言葉の本質と言ってよく、言葉を言葉たらしめるものは、違いを違いとして受けとめられるだけの器量です。

4　言葉には、おおざっぱに言って、二つあります。一つは、他者を確かめる言葉です。挨拶の言葉。手紙の言葉。電話の言葉がいちばんいい例です。電話はだれかにかけるもの、そしてだれかからかかってくるものです。つまり、他人なしには存在しない道具です。それに、メディアの言葉。情報の言葉。わたしたちの日常のおおくの言葉は、そこに他者がいる、他者が感じられる、そういう言葉です。あるいは、他者を確かめるための方法としての言葉です。言葉には、もう一つの言葉があります。自分を確かめる言葉です。ここに自分がいると感じられる言葉、自分を確かめるための、あるいはそのための方法としての言葉です。本の言葉はいつもそうでしたし、今でもそうですが、歌や映画、マンガやドラマも、ただおもしろいというだけでなく、共感したり反発したり、ここに自分とおなじ人間がいる、そこに自分の世界があると感じられる、そうした「私」の言葉でできています。

5　他者を確かめる言葉と、自分を確かめる言葉と、わたしたちがもつ言葉には二つの方向、二つの働きがあります。技術革新の大波がおしよせてきてめざましくすすんだのは他人を確かめる言葉の技術ですが、自分を確かめる言葉の技術のほうはどうかと言えば、本なら本を開いて読む。歌なら、歌に耳をかたむける。映画なら映画館で、あるいは部屋でビデオを見る。マンガならページを追う。今も、そんなふうに個人的です。インターネットのような新しい空間がひろがって、他人を確かめる技術がとんでもなくすすんでも、自分を確かめる言葉のあり方が、だからといって変わってゆかないのは、自分を確かめる方法は心の働きだからです。万事にソリッドさ、堅固さをつくりだしてきた技術革新のあり方とは違って、心というのは、かたちのない見えないものにすぎません。心、と簡単に言うことはできても、その心は、人の身体のどこにあるのか。心臓がどこにあるかはわかる。指がどこにあるか、眼球がどこにあるかもわかっています。しかし、心が身体のどこにあるのか。技術が働きかけることができるのは、そこにあるとわかっているもので、それを変え

たりつくったりすることができる。けれども、心はどこにもないものだから、言葉でしか言えないのです。

6 そのため技術革新の華やかな時代におろそかにされがちなのは、心の働きです。心の働きとか、あるいは勘どころといった訳のわからないものは、もはや時代遅れに見えます。〔 B 〕流行は、すべてではありません。わたしたちのあいだには言葉でしか言えないもの、言葉でしか読みとれないものが、どうしたってあるからです。そもそも社会が、現実が、世界がそうです。社会や現実や世界は地図のうえにはないし、これがそうだとも指させない。にもかかわらず、わたしたちは社会というものがあると熟知しているし、現実というものをひしひしと実感しているし、世界というものがあるということも知りぬいています。どうやって？　言葉によって、です。言葉からしか感受できないものがある。そのことをわたしたちに教えてくれるのが、言葉です。

（長田（おさだ）　弘（ひろし）「読書からはじまる」より）

（注）
○ 1～6は段落符号である。
○ あつらえる＝注文してつくらせる。
○ 体系＝一定の原理に基づいて組織された全体。
○ グローバル・スタンダード＝国際標準。
○ ベルファスト＝イギリス、北アイルランドの中心都市。
○ 器量＝ここでは、人の心の大きさのこと。
○ ソリッドさ＝ここでは、かたちがあるということ。
○ 勘どころ＝はずしてはならない最も重要なところ。

㈠　①その順序を逆にして考えるほうがいいとあるが、筆者は言葉と人の関係をどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　私たち人間は、毎日の経験を通して言葉を覚え、大人になるにつれて言葉を道具としてつかいこなしてきた。
イ　私たち人間は、古い言葉を覚えることで、言葉には自分たちよりも長い歴史があることを自覚してきた。
ウ　私たち人間は、すでに言葉がある中に生まれ、周囲にある言葉を自ら覚えることで人として成長してきた。
エ　私たち人間は、生活に必要なものをつくるだけでなく、生活を変えるために必要な言葉もつくり出してきた。

㈡　②言葉は、人の道具ではなく、人の素材なのだとあるが、筆者がこのように考える理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　人は言葉を自分のものにすることで他者とのつながりを認識し、他者との関係の中で自分の存在を確認することができるから。
イ　人は生まれると同時に多くの言葉を覚え、日常的につかうことによってより人間らしい生活を営んでいくことができるから。
ウ　人は長い時間をかけて言葉の体系を覚えていく過程で、人と人とのつながりを自らつくり出していくことができるから。
エ　人は言葉を用いて他者とのつながりをつくり出し、新しい技術によって自分は孤独な存在ではないと確かめることができるから。

(三) 〔 A 〕、〔 B 〕にあてはまる最も適当なことばを、次のアからキまでの中からそれぞれ選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア やがて　イ せめて　ウ むしろ　エ しかし
オ たとえ　カ すると　キ それとも

A
B

(四) 第三段落の中で、筆者は「世界の通用語」について述べている。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 国境を越えて働きに行く人たちが増えてきたため、どの国でも通用する最小限の基準が必要であり、その基準を満たしている言葉が世界の通用語となる。

イ 人々をつなぐ基準が世界的に共通になっているため、地域性の違いを乗り越え、表情や身ぶりといったコミュニケーションを必要としない言葉が世界の通用語となる。

ウ 人々の交流が世界的に広がっているため、それぞれの違いを認めるコミュニケーションが求められており、不完全であっても違いを大切にする言葉が世界の通用語となる。

エ 言葉とはそもそも地域性に根ざしたものであるため、互いの言葉の違いを認め、伝えるためのさまざまな工夫を受けいれられる言葉が世界の通用語となる。

(五)　次の文章は、第四段落以降の内容を、ある生徒がまとめたものである。①から⑨までの文の中から、本文に書かれていない考えを含むものを一つ選んで、その番号を書きなさい。

①挨拶や手紙、電話は、相手を想定し、他者の存在を必要としたものであり、メディアの言葉も、伝える相手の存在が前提であって他者なしには存在しないものだといえる。②日常の言葉の多くは、他者が感じられる、あるいは、他者を確かめる方法としての言葉である。

③一方、本の言葉、歌や映画、マンガやドラマの言葉は、登場人物と自分が同じである、そこに自分の世界があると感じることができる言葉である。④私たちは、これらの言葉を通じて、自分を確かめているといえる。⑤このとき、私たちは虚構の世界に自由に心を遊ばせ、登場人物とともに生きているといえるのである。⑥こうした自分を確かめる言葉のあり方は、いつの時代も個人的である。⑦それは、かたちとして見ることのできない、心の働きに関わっているからである。

⑧技術革新が進み、他者を確かめる言葉の技術が大きく向上している。⑨しかし、どれだけ技術革新が進んだとしても、私たちは、心の働きといった、言葉でしか感受できないものの存在に、言葉によって気付くことができる。

㈥　次のアからオまでの中から、その内容がこの文章に書かれた筆者の考えに近いものを二つ選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　国際化が進展し、世の中に存在する多くの基準が世界で共通のものとなっている。したがって、今後、言語の分野でグローバル・スタンダードとなるものは、世界の通用語である英語だといえる。

イ　人は生活を支えるさまざまなものをつくり出してきたが、言葉はずっと昔から私たちの周りにあるものである。そして、私たちは言葉を覚えることで、自分が一人ではないと知ることができる。

ウ　技術革新が進むことで社会が急速に変化している。そのため、私たちのコミュニケーションのあり方も大きく変わり、人は言葉から他人の気持ちを理解することが難しくなっている。

エ　自分を確かめる方法は一人で行うものばかりではない。たとえば、読者がマンガの登場人物の言動に共感しているときは、作者と読者双方が世界を確かめ合っている場面だといえる。

オ　具体的にかたちで示すことができないものは、言葉でしか表すことができない。したがって、私たちは社会や現実といった抽象的な物事や考えを言葉によって理解し、実感しているのである。

□　□

四　次の古文を読んで、あとの㈠から㈣までの問いに答えなさい。（本文の------の左側は現代語訳です。）

小式部（こしきぶ）が「大江山（おほえやま）いくのの道」、周防内侍（すはうのないし）が「春のよの夢ばかりなる」、いせの大輔（たいふ）が「けふ九重ににほひぬる」などよみし。これらは、思案のいとまなく（時間をかけることなく）、すぐによみ出（い）だしたる歌なり。これらは、つねづね此（こ）の道に心を染めて（心を深く寄せて）、行住坐臥（ぎやうぢゆうざぐわ）（日常のあらゆる時に）、見るもの、聞くものにつけて、①その心を放たず、執しけるゆゑ（深く思っていたため）、かやうのめでたき歌も出できたる事なり。「もとより、此の道の堪能（かんのう）なれば（名手であるので）、②さも有るべき（あるだろう）」といへる人も有るらめど（あるようだが）、それは自棄（投げやり）といへるものなり。たれ人にもせよ、日本に生まれぬる人、③いづれか歌情（うたごころ）のなき事は有るまじ。「舜（しゆん）も人なり、我も人なり」と、もろこし（中国）の学者のいひけんもむべなり（そのとおりである）。つとめて学び、好みもて行けば、自然と天地にも感応の歌（天地の神々の心を動かす歌）、出でくる事、うたがひなし。

（「初学考鑑（しよがくこうかん）」より）

（注）○　小式部（こしきぶ）・周防内侍（すはうのないし）・いせの大輔（たいふ）＝平安時代の歌人。
○　此（こ）の道＝ここでは、和歌をよむこと。
○　舜（しゆん）＝古代中国で理想的な政治を行ったとされる伝説の王。

㈠ ①その心を放たずとあるが、これはどのような態度を表しているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　先人の教えを守る　イ　和歌に没頭する　ウ　友人を信頼する　エ　仏道修行に集中する

㈡ ②さの内容として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　即座にすぐれた歌をよんだこと
イ　日頃から和歌を準備していたこと
ウ　以前に作った歌を発表したこと
エ　後世にまで和歌が残ったこと

㈢　③いづれか歌情（うたごころ）のなき事は有るまじの現代語訳として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　どのように和歌をよむ心を生み出せばよいのか
イ　どんな人に和歌をよむ心は生まれるのだろうか
ウ　どんな人にも和歌をよむ心はあるにちがいない
エ　どこにいても和歌をよむ心をなくしてはいけない

㈣　次のアからエまでの中から、その内容がこの文章に書かれていることと一致するものを一つ選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　本当にすばらしい和歌はどの国の人でも感動させることができる。
イ　和歌は心に感じたことを飾らずにできるだけ早くよむのがよい。
ウ　和歌がすぐによめないことを才能のせいにしては名を残せない。
エ　日頃から徹底して和歌に打ち込むことですばらしい歌が生まれる。

〈Note〉

二〇一九年度

愛知県公立高校入試問題（A）

一

解答

(一)イ　(二)ア　(三)エ　(四)（人類は、）身体を環境に適応させて進化してきた動物と異なり、眼に含まれた過剰な想像力によって、自然を加工し文明を進歩させることで生き抜いてきた。（70字）（同意可）　(五)①X、抽象化　Y、自由な想像　②Z、思想

解説

(一)生命に眼が誕生した時期や、眼の特徴について他の感覚器官と比較して説明したあとに、「生命にとっての最大の関心ごと」は「自らの生存」であるとして、「…ために眼は生まれた」という考えを述べている。

(二)特殊であることについて、「私たちの頭の中の想像が含まれていること」と説明している。さらに、眼で見るときに含まれる「想像」について、「光を反射した物体の名前や材質…さらにはそこにある理由や先の可能性というように、光そのものから派生した様々な想像」だと具体的に説明している。

(三)直後の「自分の必要性に合わせて…自由に加工する可能性も同時に見る」に注目。この「自由に加工する可能性」について、「様々な角度から自然を眺めて、その成り立ちや因果関係を想像する」ことで、石器や釣り針などの「精巧な道具」を生みだすことができると述べている。

(四)「動物の進化とはまるで異なり…適応させる形ではなかった」という違いをおさえる。さらに、「自然を加工して物や道具を生みだすことで、身体を外へと拡張させながら生き延び」てきたという人類の「生存戦略」について、「視覚の中に想像力が滑り込んだこと」が「原因」であり、「人類の進化は…文明を進歩させることへと変わった」ということをおさえてまとめる。

(五)①X、「三つ目の特徴」の具体的な説明で、「存在するものの性質や特徴や要素だけを取り出し、抽象化して捉えることもできる」と述べていることに着目する。Y、「三つ目の特徴」について、「存在しないものを想像する力は自由である」「その自由な想像が、目の前の物事の認識や解釈…未来の予想にも大きな影響を及ぼしている」として、こうした想像力を「空想」と表現していることに着目

する。②「つまり…といえます」というAさんの考えを述べた文で、「生活や行動を規定する考え」という意味のことばをおさえる。

二

解答

㈠①す(える)　②協議　㈡イ

解説

㈡「伝承」と書く。アは「参照」、イは「了承」、ウは「談笑」、エは「合唱」。

三

解答

㈠ウ　㈡ア　㈢A、ウ　B、エ　㈣エ　㈤⑤　㈥イ・オ

解説

㈠「その順序」は、「言葉と人のかかわり」での「まず人がいて、自分があって、そして言葉がある」という順序を指す。「まず言葉があって…そして人がいる」という逆の順序について、「自分が生まれる前からずっと」あるという言葉のなかに、「わたしたち」は生まれ、古い言葉を覚えると説明し、「成長するとは、言葉を覚えるということ」と述べている。

㈡人が言葉を覚えることで「自分は一人ではない」と知り、言葉を自分のものにしてゆくことで「言葉のつくりだす他者とのつながりのなかに…確かめてゆく」と述べ、このことを「人は何でできているか。人は言葉でできている、そういう存在なのだ」とまとめている。人が「そういう存在」であることを受けて、言葉は「人の素材」だと表現していることをおさえる。

㈢A、「完全な言葉」と「不完全な言葉」を比べ、前者よりも後者の方が「国境を越える言葉」に当てはまると強調している。B、「もはや時代遅れに見え」ると述べたことに対し、「流行は、すべてではありません」と対照的な考えを示している。

㈣「言葉というのは、どこまでも…どうあってもグローバル・スタンダードにならない」という前提を示した上で、「国境を越える言葉」は「不完全な言葉」だと述べている。さらに「カタコト言葉と、表情と、身ぶり」でコミュニケーションをとることを挙げ、「言葉を言葉たらしめるものは、違いを違いとして受けとめられるだけの器量です」と述べている。

(五)「歌や映画、マンガやドラマ」の言葉について、「共感したり反発したり、ここに自分とおなじ人間がいる、そこに自分の世界があると感じられる、そうした『私』の言葉でできて」いると述べている。「虚構の世界」やその「登場人物とともに」生きるというような空想の感覚ではないことをおさえる。

(六)「人にとってなくてはならないと思えるもの、毎日の…人がつくりだしてきたものです」と述べた上で、言葉は「自分が生まれる前からずっとあって」、言葉を覚えることで成長し、「この世で自分は一人ではないと知る」と述べている。また、「心」のように「かたちのない見えないもの」について、「言葉でしか言えない」とし、さらに「社会や現実や世界」について、言葉によって熟知し、実感していると述べている。

四

解答

(一)イ　(二)ア　(三)ウ　(四)エ

解説

(一)小式部や周防内侍、いせの大輔などの例を挙げて、歌をよむことについて述べていることに着目する。

(二)三人が「思案のいとまなく」「めでたき歌」をよんだことについて、筆者は、かれらが常に和歌のことを考えていたからだと考えているが、そもそもこの三人が「此の道の堪能」だから可能だったという、筆者と異なる意見を示していることをおさえる。

(三)「いづれ」は、どれ、だれ、いつ、など不特定のものごとを指す。「なき事は有るまじ」は、「ないということは有るはずがない」と、否定の表現を二重に使うことで「有る」ことを強調している。

(四)「日本に生まれぬる人」なら、才能に関係なく、「つとめて学び、好みもて行けば」すばらしい歌が自然とよめるはずだと考えている。

口語訳

小式部は「大江山いくのの道」、周防内侍は「春の夜の夢ばかりなる」、いせの大輔は「きょう九重に匂いぬる」とよんだ。これらの歌は、考えるのに時間をかけることなく、すぐによみ出した歌である。かれらは、常日頃から歌の道に心を深く寄せて、日常のあらゆる時に、見るもの、聞くものについて、歌をよむという気持ちを忘れることなく常に持ち続け、深く思っていたため、このようなすば

らしい歌もよみ出されてきたということである。「もともと、歌の道の名手であるので、このようなこともあるだろう」と言う人もあるようだが、それは投げやりな見解というものである。誰であれ、日本に生を受けた人は、どんな人にも和歌をよむ心はあるにちがいない。「舜も人間であり、我も人間である」と、中国の学者が言ったこともそのとおりである。努力して学び、好んで打ち込めば、自然と天地の神々の心を動かす歌が、出てくることは、まちがいないのである。